

今週の為替相場見通し(2018年5月21日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.21 ~ 111.08	110.75	109.50 ~ 113.00
ユーロ	(ドル)		1.1750 ~ 1.1996	1.1772	1.1600 ~ 1.1900
(1ユーロ=)	(円)		129.55 ~ 131.38	130.39	129.00 ~ 132.00
英ポンド	(ドル)		1.3452 ~ 1.3608	1.3475	1.3350 ~ 1.3480
(1英ポンド=)	(円)	*	147.99 ~ 150.01	149.18	148.00 ~ 150.50
豪ドル	(ドル)		0.7447 ~ 0.7565	0.7512	0.7350 ~ 0.7650
(1豪ドル=)	(円)	*	82.18 ~ 83.43	83.19	82.00 ~ 85.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 上野 智久

(1)今週の予想レンジ: 109.50 ~ 113.00 円

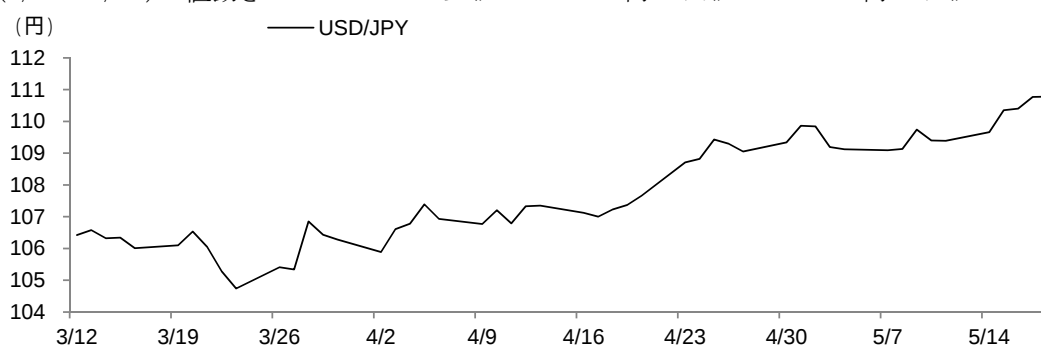
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は110円の壁を上抜けし、レンジを切り上げる展開。14日は序盤に一時週安値となる109.21円をつける場面があったが、ロス米商務長官が「EUとの間で合意がなければ鉄鋼・アルミニウムに制裁関税を適用する」と発言したことでユーロが下落。ドル買い地合いが優勢になる中、ドル/円は109円台後半まで上昇。15日は米5月NY連銀製造業景気指数が市場予想を上回ったことや、米4月小売売上高では前回分が上方修正されたこと、加えて米10年債利回りが上昇したことを受け、ドル/円は200日移動平均を上抜け110円台半ばまで上昇。16日は冴えない米指標の結果を受けドル/円は110円近辺まで小緩む場面がみられたが、米債利回りが上昇する動きにサポートされ110円台半ばまで値を戻す展開。17日は豪4月雇用統計が市場予想を上回る結果に、対豪ドルでドル売りが強まりドル/円はやや値を下げたが、米5月フィラデルフィア連銀景況指数が予想を大きく上回ると110円台後半まで上昇した。18日は米債利回りが上昇する動きにドル/円は一時週高値となる111.08円をつける場面も見られた。海外時間終盤にかけて、米債利回りに調整が入るとドル/円も110円台半ばまで下落し、越週した。

今週のドル/円相場は底堅い展開を予想する。19日に米中通商協議の共同声明が発表され、中国が米国からの輸入を大幅に拡大するなど、米貿易赤字の削減に向けた取り組みを行うことで合意。具体策を協議する間は両国が追加関税の発動を保留することでも一致しており、米中貿易摩擦に関して一旦は事態の収束を見る可能性が高そうだ。同問題の懸念後退を受けたリスクセンチメントの改善、加えて米債利回りが上昇基調にあることは、ドル/円にとってはポジティブ材料。ドル/円は引き続き堅調な推移になると考えている。トレンドを転換させうる材料としては地政学リスクが挙げられる。北朝鮮情勢については南北閣僚級会談の中止が発表される中で、来月12日開催予定の米朝首脳会談への不透明感が燻っているが、あくまで北朝鮮が同会談で優位な条件を引き出すための“揺さぶり”の域を出ないものだと考えている。イラン情勢についても、イラン・欧州各国が現行の枠組みの維持を標榜している中で、劇的な情勢悪化は起きにくいだろう。いずれも、近々で不可逆的な事態の悪化に至る可能性は低く、ドル/円が大きく値を崩すリスクは限定的とみている。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/14~5/18)の値動き: 安値 109.21 円 高値 111.08 円 終値 110.75 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 菊池 雄太

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1900 129.00 ~ 132.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は下落する展開。週初14日に1.19台前半でオープンしたユーロ/ドルは、ECBメンバーのビルロッドガロー仏中銀総裁の「ECBの利上げは(拡大資産購入プログラムが終了してから)数年後ではなく、数四半期後だと予想する」との発言を受け、ユーロ売りポジションを解消する動きが強まり一時週高値となる1.1996をつけた。しかし、このレベルでは売り意欲も強く1.19台前半まで反落。15日はユーロ圏各国の1~3月期GDPが市場予想比弱めの結果となり、また米経済指標の良好な結果を受けたドル買いの動きも相俟って1.18台前半まで続落した。16日は1.18台半ばまで回復するも、イタリアで連立協議を行っている「五つ星運動」と「同盟」の2党がECBに対し2500億ユーロの債務減免を要請するとの報道を受けユーロ売りが強まる展開に1.1763、ユーロ/円も129.53円をつけた。しかし、「同盟」の経済担当責任者のボルギ氏が報道を否定したことから1.18台前半まで反発。17日は米経済指標の堅調な結果や米金利上昇を背景にドル買いの流れが続く中、1.18近辺での値動きとなり、18日にはイタリアの政治不安を嫌気し、一時週安値となる1.1750をつける場面もあった。その後は水準を少し戻し、1.1772レベル、対円では130.39円レベルで越週した。

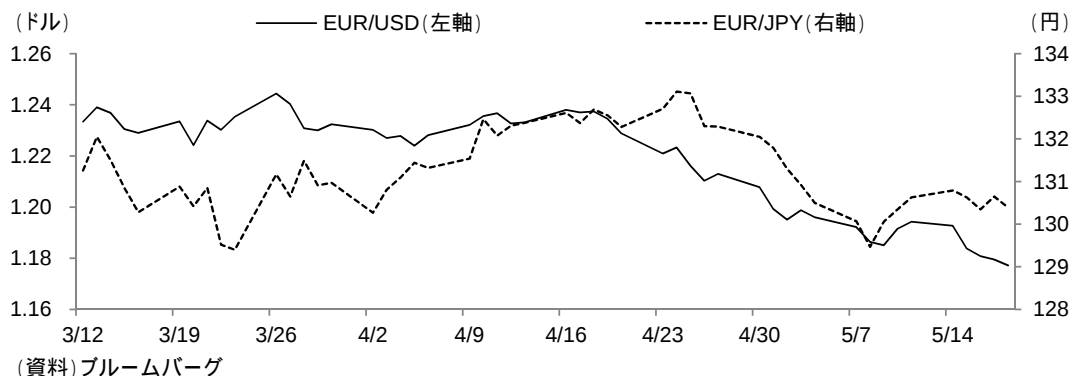
今週のユーロ相場は、引き続き上値の重い展開を予想する。足元のメインピックであるイタリアの政局情勢について、「五つ星運動」と「同盟」は18日、連立政権樹立に向けた政策で合意。政策合意内容には、「五つ星運動」の公約であった最低所得保障や「同盟」の要求であった法人税や個人所得税の減税を受け入れる一方で、これまでの合意の草案に含まれていたとされるECBに対する2500億ユーロの債務免除要請は削除された。しかし合意内容は財政拡大色も強く、イタリア金利の上昇、イタリアCDSの拡大に表れている通り、イタリア政局不安は継続しそうである。独伊の金利スプレッドの拡大がユーロ圏の金融環境のタイト化を示している状況下、ECBのコンスタンシオ副総裁からは、ECBは状況を注視する必要があるとのコメントが出ていた。また、ユーロ圏経済については、緩やかな減速局面、一時的なものという見方もあるが、エコノミック・サブライズ指数(経済指標予想と実績との乖離を指数化)は大きくマイナス圏に沈んでいる。引き続き経済指標の下振れが継続すれば、ユーロ圏の経済成長に疑問符が付き、ECBはハト派寄りへのシフトも検討するかもしれない。一方で、米国では良好な経済指標が継続しており、米金利上昇、米債利回りカーブのスティープ化はドルの支援材料である。ユーロは上値の重い展開が続くそうだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/14~5/18)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1750 高値 1.1996 終値 1.1772

(対円) 安値 129.55 高値 131.38 終値 130.39



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3350 ~ 1.3480 148.00 ~ 150.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、比較的狭い値幅を、対ドルで下落、対ユーロ、対円で上昇。値動きが物語る通り、この間進んだのはドル全面高で、対ユーロ、対円でポンドが上昇したのも、ポンド堅調と言うよりは、ポンドの方が、ユーロや円よりも、ドル高の影響が軽微だったということであろう。ドル高の背景に、米長期金利上昇があったのは確か。米10年国債利回りは3%を明確に上回り、17日までに、7年ぶりの高水準となる、3.10%台に乗せた。もっとも、米長期金利上昇の背景に関しては、漠とした物価上振れ観測や米4月小売売上高の上振れ(前月分の上方修正)などは聞かれたものの、はっきりした要因は特定できなかった。もうひとつ、ドルへの資金集中を促した要因として、アルゼンチン・ペソ、トルコ・リラといった新興市場通貨の急落も考えられた。両国は、高騰する物価に対し、中銀の金融引き締めが後手に回ったという構図が共通した。英要因では、15日の英雇用統計が注目されたが、1~3月平均賃金も、同失業率も、市場予想に沿った内容で、ポンドが材料視した様子は読み取れなかった。EU離脱交渉に関しても、この間、目立った進展はなく、英国内の報道は、専ら19日のハリー王子の結婚式の話題に集中していた。後述する通り、今日の世界経済が経験しているのは、世界の経済秩序の地殻変動とも言える大変革の可能性もあり、それがもたらす不透明感の中で、ポンドも明確な方向感を見出せなかったのではないかと。

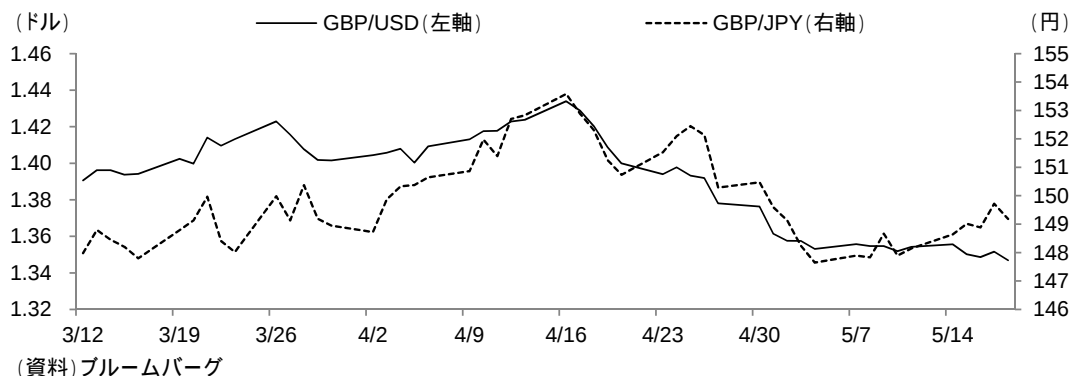
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着の継続を予想。米長期金利上昇は、取りも直さず米国債が売り込まれていた事実を意味し、今更ながら、必ずしも「ドルへの資金流入」とは合致しない。また、同金利が週引けに掛けて天井を打って下落していたにもかかわらず、ドルが堅調なまま週の取引を終えた事実にも困惑する。ドルへの資金流入を促した別の理由を敢えて挙げるなら、米によるイラン核合意からの撤退や、在イスラエル米大使館のエルサレム移転などを通じた、地政学的リスクの高まりが考えられよう。並行した円安や世界的な株価堅調を鑑みるに、それは、従来であれば単純に「リスク回避」という名目で円高や株安を促したリスクに対する認識が、変容してきた可能性を示唆する。そのリスクとは、ひと言で表すなら米と欧州の断裂。振り返って見れば、トランプ大統領誕生以来、米と欧州の間には、温暖化防止に始まり、貿易(鉄鋼/アルミ関税)、イラン核合意など、主要な政策における意見の隔たりが目立つ。18日のメルケル独首相訪ロや、今週予定されるマクロン仏大統領とプーチン大統領の会談に「他意」はないと言うものの、「米国に袖にされた欧州としては、ロシア(中国)にすり寄るのが得策」との憶測にも、一定の説得力は見出せるのではないかと。3月に起きたロシア元二重スパイ毒殺未遂事件以降の顛末から察して、英の立ち位置を定めるのなら、米陣営に属すると見るのが妥当であろう。問題は、こうした構図の中で、米陣営に属することが、英政治/経済の将来にとって得策であるかどうかの判断。それがいつまでドル買い要因と読まれるとも限らないし、目先のポンド動向に直接影響するような類の問題では勿論ないが、EU離脱交渉の今後も踏まえて、頭の片隅に置いておきたい構図ではないかと。英経済指標では、今週、23日(水)に英4月CPI、24日(木)に英4月小売売上高と主要マクロ経済指標の発表が並ぶが、英中銀の英景気認識の一貫性の欠如から、余程大きく想定から外れた数字でも出ない限り、市場が材料視する可能性は考え難い。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/14~5/18)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3452 高値 1.3608 終値 1.3475

(対円) 安値 147.99 高値 150.01 終値 149.18



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 鶴田 涼平

(1) 今週の予想レンジ: 0.7350 ~ 0.7650 82.00 ~ 85.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、週後半にかけて対ドルで小幅に下落、対円で小幅に上昇する展開となった。週初14日の豪ドル相場は対ドルで0.75台半ば、対円で82円台半ばでオープン。特段目立った材料に乏しい状況下、豪ドルは一時週高値となる0.7565をつけるも米長期金利が小幅上昇する中でドル買いが進み豪ドル相場は対ドルで0.75台前半に軟化、対円では82円台半ばでの横ばい推移となった。15日、米10年債利回りが2011年7月以来の水準となる3.09%台まで上昇し、この日発表された米経済指標が底堅い内容となったことも相俟って全般的なドル買い優勢地合いとなると豪ドルは一時週安値となる0.7448まで下落。対円でも82円台前半まで下落する展開となった。なお、この日公表された5月豪州準備銀行(RBA)理事会議事要旨では、「キャッシュレートを現行水準で維持し、RBAが安定と信頼の源になることが適切」との文言が新たに盛り込まれた。16日、この日発表された豪第1四半期賃金価格指数は前年同期比で2.1%、前期比で0.5%と低調な伸びとなり0.74台後半で推移していた豪ドルは0.74台半ばまで小幅に下落。その後は0.75台前半まで反発。対円では一時82円台前半まで下落するも、ドル円相場が堅調推移する中で82円台後半まで上昇する展開となった。17日、この日発表された豪4月雇用統計は、就業者数が22.6千人増、前回予想外に減少に転じたフルタイム就業者数は32.7千人増となり0.75台前半で推移していた豪ドルは0.75台半ばまで上昇、対円でも約1ヶ月ぶりに83円台に乗せる展開となった。18日、堅調な原油相場を背景に米金利の上昇が続く中でドル円相場が111円台まで上昇すると豪ドル相場も対円で83円台半ばまで堅調推移。対ドルでも対円の上昇に連れる格好に0.75台前半での底堅い推移となるも、ドル買い優勢地合いとなり一時0.74台後半まで弱含む場面もあったが、結局対ドルで0.75台前半、対円では83円台前半で越週した。

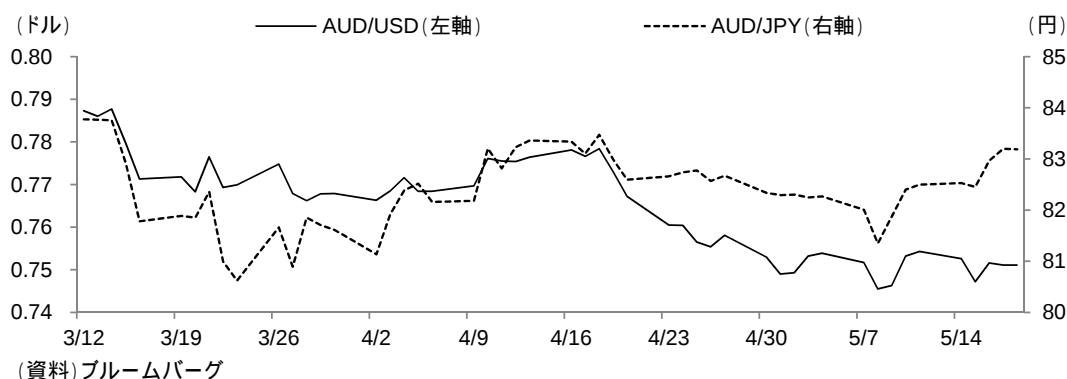
今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。米国によるイラン核合意離脱や、米イスラエル大使館のエルサレム移転など中東情勢を巡る地政学リスクを煽るイベントがあったものの、特段リスクセンチメントが悪化した雰囲気はあまり感じられず、豪ドル相場にとって良好なマーケット環境が続いているように思える。しかし、豪ドル買い材料には乏しく、ドル買い優勢地合いが続く中で一方的に豪ドルが売られる展開は考えにくいと、上値の重い推移が基本線となりそうだ。足許で原油相場の堅調推移が続く中でコモディティ価格の上昇も期待されるところではあるも鉄鉱石価格は頭打ち感が漂っており、むしろ原油価格上昇によるインフレ期待感を背景とした米金利の上昇に米豪金利差拡大観測が強まり、豪ドル相場が下押しされる展開も考え得るところ。先週公表されたRBA議事要旨では、引き続き政策金利が過去最低水準に維持される見通しが明らかとなり、課題となっている賃金上昇率についても先週発表された賃金価格指数が示すように伸び悩んでいる状況。豪ドルを積極的に買い進める材料感に乏しい中、米10年債利回りが2011年以来の水準まで上昇するなどドル買い材料は目立っており、今週の豪ドル相場も堅調なドル相場を背景に上値の重い展開が続くと予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/14~5/18)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7447 高値 0.7565 終値 0.7512

(対円) 安値 82.18 高値 83.43 終値 83.19



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。